

二十七歳

坂口安吾

青空文庫

魂や情熱を嘲笑^{あざわら}うことは非常に容易なことなので、私はこの年代に就^つて回想するのに幾たび迷ったか知れない。私は今も嘲笑うであろうか。私は讚美するかも知れぬ。いずれも虚偽でありながら、真実でもありうるものが分るので、私はひどく馬鹿馬鹿しい。

この戦争中に矢田津世子^{やだつせこ}が死んだ。私は死亡通知の一枚のハガキを握って、二、三分間、一筋か二筋の涙というものを、ながした。そのときはもう日本の負けることは明らかな時間で、いずれ本土は戦場となり、私も死に、日本の男はあらし死に、女だけが残って、殺氣立った兵隊たちのオモチャになつて殺されたり可愛^{かわい}がられたりするのだらうと考えていたので、私は重荷を下したようにホツとした氣持があつた。

つまり私はそのときも尚^{なお}、矢田津世子にはミレンがあつたが、矢田津世子も亦^{また}、そうであつたと思う。

私は大井広介^{おおいひろすけ}にたのまれて、戦争中、「現代文学」という雑誌の同人になつた。そのとき野口富士男^{のぐちふしゆう}が編輯に當つて、私たちには独断で矢田津世子に原稿をたのんだ。その雑誌を見て、私はひどく腹を立てた。まるで私が野口富士男をそのかして矢田さんに原稿をたのませたように思われるからであつた。果して井上友一郎^{いのうえともいちろう}がそうカン違いを

して、編輯者の権威いずこにありやと云つて大井広介にネジこんできたそうであるが、井上がそう思うのは無理もなく、それだけに、矢田津世子が、より以上に、そう思いこむに相違ないので、私の怒りは、ひどかったのだ。

けれども、そのとき、野口富士男の話に、矢田さんが、原稿を郵送せずに、野口の家へとどけに来たという、矢田さんは美人ですなという野口の話をしきながら、私はいささか断腸の思いでもあった。

まだ私たちが初めて知りあい、恋らしいものをして、一日会わずにいると息絶えるような幼稚な情熱のなかで暮していた頃、私たちは子供ではない、と矢田津世子が吐きすてるように云った。それは愛^{あいよく}慾に就て子供ではないという意味ではなく、私たちは大島敬司という男にだまされて変な雑誌に關係していたので、大島に対する怒りの言葉であつたが、私は変にその言葉を忘れることができない。

あなたは大人であつたのか。私は？ 私は馬鹿馬鹿しいのだ。何よりも、魂と、情熱の^{もつと}尤もらしい顔つきが、せつなく、馬鹿馬鹿しくて仕方がないのだ。その馬鹿らしさは、私以上に、あなたが知っていたような気がする。そのくせ、あなたは、郵便で送らずに、野口の家へわざわざ原稿をとどけるような芸当ができるのだが、それを女の太^{ふてぶて}々しさと云

ってよいのだから、悲しさというのだから、それまでを、馬鹿馬鹿しいと言い切る自信が私にはないので、私は尚さら、せつないのだ。

その頃から、あなたは病^{びよう}臥^がしたらしい。そして、あなたが死んで、ハガキ一枚の通知になるまで、私はあなたが、肺病でねていることすら知らなかった。

私の母は私とあなたが結婚するものだと思います。こみ信じていたが、ぐうたらな私に思いを残して、死んでいた。あなたのお母さんは生きていたのだ。あなたの死亡通知の中には、生きているアカシの、お母さんの名があつたから。矢田チエという、私は名すら忘れてはいない。私の母以上に、私たちの結婚をのぞんでいた筈^{はず}であつた。私があなたの家で御馳^{ごち}走^{そう}になり酔^よつ払^{はら}うのを目を細くして喜んでいるお母さんであつた。際限もなく私に話しかけるお母さん。けれども、その言葉は、あなたの通訳なしには、私には殆^{ほとん}ど分^わらなかった。ひどい秋田弁なのだから。

死亡通知は印刷したハガキにすぎなかったが、矢田チエという、生きているお母さんの名前は私には切なかつた。そして、その印刷した文字には「幸うすく」津世子は死んだと知らせてあつた。「幸うすく」、あなたは、必ずしも、そうは思っていないだろうと私は思う。人の世の、生きることの、馬鹿馬鹿しさを、あなたは知らぬ筈はない。

けれども、あなたのお母さんは「幸うすく」そう信じているに相違なく、その怒りと呪いが、一人の私に向けられているような気がした。そして、私は泣いた。二、三分。一筋か二筋の、うすい涙であった。そして私が涙の中で考えた唯一のことは、ある暗黒の死の国で、あなたと私の母が話をして、あなたが私の母を自分の母のように大事にしてくれている風景であった。そして、私は、泣いたのだ。

私は、この尤もらしい顔かおつき附が切ない。こう書いてしまうと、これだけの尤もらしさになつてしまふ、表現のみじめさが切なく、馬鹿馬鹿しいのだ。そうかと云つて、そうであるまいとすると、私はてんから、情熱と魂ちようしやうを嘲笑してしまふような気がする。私は果して書きうるのか。



私はそのとき二十七であった。私は新進作家とよばれ、そのころ、全く、馬鹿げた、良い気な生活に明けくれていた。

当時の文壇は大家中堅クツワをならべ、世は不況のドン底時代で、雑誌の数が少く、原稿料を払う雑誌などいくつもないから、新人の得る余地がない。そういう時代に、ともかく新進作家となつた私は、ところが、生れて三ツほど小説を書いたばかり、私は誘われて

同人雑誌にはいりはしたが、どうせ生涯落伍者らくごしやだと思っており、モリエールだのボルテールだの、そんなものばかり読んでおり、自分で何を書かねばならぬか、文学者たる根柢いでき的な意欲すらなかった。私はただ文章が巧うまかったので、先輩諸家に買いかぶられて、唐突に、新進作家ということになってしまったものであった。

私は同人雑誌に「風博士」という小説を書いた。散文のファルスで、私はポオの Xing Paragraph とか Bon Bon などという馬鹿バナシを愛読していたから、俺おれも一つ書いてやろうと思ったまでの話で、こういう馬鹿バナシはボードレエルの訳したポオの仏訳の中にも除外されている程だから、まして一般に通用する筈はない。私は始めから諦めていた。あきらただ、ボードレエルへの抗議のつもりで、ポオを訳しながら、この種のファルスを除外して、アツシャア家の没落などを大事にしているボードレエルの鑑賞眼をひそかに皮肉る快で満足していた。それは当時の私の文学精神で、私は自ら落伍者の文学を信じていたのであった。

私は然し自信はなかった。ない筈だ。根柢がないのだ。文章があるだけ。その文章もうぬぼれる程のものではないので、こんなチャチな小説で、ほめられたり、一躍新進作家になろうなどと夢にも思っていなかった。

そのころ雑誌の同人六、七人集つて下落合あつましも落ちあいの誰かの家で徹夜して、当時私たちは酒を飲まなかったから、ジャガ芋いもをふかして塩をつけて食いながら文学論で徹夜した。その夜明け、高橋幸一（今は鎌倉文庫の校正部長）が食う物を買いに外出して、ついでに文藝春秋を立読みして、牧野信一が「風博士」という一文を書いて、私を激賞しているのを見出したのである。

人間のウヌボレぐらいタヨリないものはない。私はその時以来、昨日までの自信のないのは忘れてしまつて、ほめられるのは当り前だと思つていた。そのとき二十六だった。七月頃であつた。そしてその月に文藝春秋へ小説を書かされ、それ以来、新進作家で、私の軽率なウヌボレは二十七の年齢にも、つづいていた。

そのころ、春陽堂から「文科」という半職業的な同人雑誌がでた。牧野信一が親分格で、小林秀雄、嘉村儀多かむらいそた、河上徹太郎、中島健蔵、私などが同人で、原稿料は一枚五十銭ぐらいであつたと思う。五十銭の原稿料でも、原稿料のでる雑誌などは、大いに珍めずらしかったほど、不景気な時代であつた。五冊ほどで、つぶれた。私は「竹藪たけやぶの家」というのを連載した。

この同行が行きつけの酒場があつた。ウヰンザアという店で、青山二郎が店内装飾をし

たゆかりで、青山二郎は「文科」の表紙を書き、同人のようなものでもあったせいらしい。青山二郎は身代を飲みつづす直前で、彼だけはシャンパンを飲みあかしたり、大いに景気がよかったが、他の我々は大いに貧乏であった。私は牧野信一、河上徹太郎、中島健蔵と飲むことが多く、昔の同人雑誌の人達とも連立って飲むことが多かった。私が酒を飲みだしたのは牧野信一と知ってからで、私の処女作は「木^こ枯^{がらし}の酒倉から」というノンダクレの手記だけれども、実は当時是一滴も酒をのまなかったのである。改造の西田義郎も当時の飲み仲間であるが、私はこの酒場で中^{なか}原^{はら}中^{ちゅう}也^やと知り合った。

ある夜更け、河上と私がこの店の二人の女給をつれて、飲み歩き、河上の家へ泊ったことがある。河上は下心があつたので、女の一人をつれて別室へ去つたが、残された私は大いに迷惑した。なぜなら、実は私も河上の連れ去つた娘の方にオボシメシがあつたからで、残された女は好きではない。オボシメシと云^いつても、二人のうちならそっちが好きというだけのことはあるが、当時私はウブだから、残された女が寝ましようよと言うけれどもその気にならない。そのうちに河上が、すんだかい、と言って顔をだした。彼は娘にフラレたのである。俺はフラレた、と言って、てれて笑いながら、娘と手をくんで、戻ってきた。この娘は十七であつた。

その翌朝、河上の奥さんが憤然と、牛乳とパンを捧げて持ってきてくれたが、シラフで別れるわけにも行かず、四人で朝からどこかで飲んで別れたのだが、そのとき、実は俺はお前の方が好きなんだと十七の娘に言ったら、私もよ、と云って、だらしく仲がよくなつてしまったのである。

この娘はひどい酒飲みだった。私がこんなに惚ほれられたのは珍らしい。八百屋やおやお七の年齢だから、惚れ方が無茶だ。私達はあっちのホテル、こっちの旅館、私の家にまで、泊り歩いた。泊りに行こうよ、連れて行ってよ、と言いだすのは必ず娘の方なので、私たちは友達のカンコの声に送られて出発するのであるが、私とこの娘とは肉体の交渉はない。娘は肉体に就て全然知識がないのであった。

私は処女ではないのよ、と娘は言う。そのくせ処女とは如何いかなるものか、この娘は知らなかった。愛人、夫婦は、ただ接吻せつぶんし、同じ寢床で、抱きあい、抱きしめ、ただ、そう信じ、その感動で、娘は至高に陶醉した。肉体の交渉を強烈に拒んで、なぜそんなことをするのよ、と憤然として怒る。まったく知らないのだ。

そのくせ、ただ、単に、いつまでも抱きあっていたがり、泊りに行きたがり、私が酒場へ顔を見せぬと、さそいに来て、娘は私を思うあまり、神経衰弱の気味であった。よろよ

ろして、きりもなく何か口走り、私はいくらか気味が悪くなったものだ。肉体を拒むから私が馬鹿らしがって泊りに行かなくなったことを、娘は理解しなかった。

中原中也是この娘にいささかオボシメシを持っていた。そのときまで、私は中也を全然知らなかったのだが、彼の方は娘が私に惚れたかどによって大いに私を呪っており、ある日、私が友達と飲んでいると、ヤイ、アングと叫んで、私にとびかかった。

とびかかったというものの、実は二、三米^{メートル}離れており、彼は髪ふりみだしてピストンの連続、ストレート、アッパーカット、スイング、フック、息をきらして影に向って乱闘している。中也はたぶん本当に私と渡り合っているつもりでいたのだろう。私がゲラゲラ笑いだしたものだから、キョトンと手をたれて、不思議な目で私を見つめている。こつちへ来て、一緒に飲まないか、とさそうと、キサマはエレイ奴だ、キサマはドイツのヘゲモニーだと、変なことを^{つぶや}ながら割りこんできて、友達になった。非常に親密な友達になり、最も中也と飲み歩くようになったが、その後中也は娘のことなど嫉^やく色すらも見せず、要するに彼は娘に惚れていたのではなく、私と友達になりたがっていたのであり、娘に惚れて私を憎んでいるような形になりたがっていただけの話であろうと思う。

オイ、お前は一週に何度女にありつくか。オレは二度しかありつけない。二日に一度は

ありつきたい。貧乏は切ない、と言って中也は常に嘆いており、その女にありつくために、フランス語個人教授の大看板をかかげたり、けれども弟子はたった一人、四円だか五円だかの月謝で、月謝を貰うと一緒に飲みに行つて足がでるので嘆いており、三百枚のほんやく翻訳料がたつた三十円で嘆いており、常に嘆いていた。彼は酒を飲む時は、どんなに酔つても必ず何本飲んだか覚えており、それはつまり、飲んだあとで遊びに行く金をチョツキリ残すためで、私が有金みんな飲んでしまうと、アング、キサマは何というムダな飲み方をするのかと言つて、怒つたり、恨んだりするのである。あげくに、お人好しひとよの中島健蔵などへ、ヤイ金をかせ、と脅迫に行くから、健蔵は中也を見ると逃げだす始末であつた。

その年の春、私は一ヶ月あまり京都へ旅行した。河上の紹介で、そのころまだ京大の学生だった大岡昇平が自分の下宿へ部屋を用意しておいてくれたが、そのとき加藤英倫と友達になつた。彼は毎晩、私を京都の飲み屋へ案内してくれて、一週間ほど神戸へも一緒に旅行した。加藤英倫も京大生で、スエデン人の母を持つアイノコで、端麗な美貌びぼうであるから、京都も神戸も女友達ばかり、黒田孝子という女流画家の可愛い女に惚れられており、この人は非常に美人であつたが、英倫はさのみこの人を好んでいるようでもなく、神戸の何とかいう、実にまずい顔の、ガサツ千万な娘になんとなく惚れるような素振りであつた。

外見だけであつたかも知れぬ。彼はセンチメンタル・トミーであつた。

これは蛇足だが、この神戸の旅行で、私はヘルマンの廃屋とかいう深山の中腹の五階建かの大洋館へ案内された。ヘルマン氏は元来マドロスか何かで、貧乏なのんだくれであつたが、兄が大金満家で、これが死に、遺産がころがりこんで一躍大金持になったのだそうで、そこでここに大邸宅をつくり、五階の上に塔をたて、この塔の中に探照燈を据えつけ、自分の汽車が西の宮駅へつくと、山の中腹の塔の上から探照燈をてらす。ヘルマン氏光の中へ現われ、光の中なる自動車に乗る。この自動車が邸宅へはいるまで、自動車と共に探照燈の光が山を動いて行くのだそうで、この探照燈は私が行つたとき、まだ廃屋の塔の中にそのまま置かれていた。軍艦などの探照燈と全く同じ大袈裟な物々しい物であつた。おかげさ

もう一つ、ブツタマゲルのはヘルマン先生の酒倉だ。庭の中の山の中腹へ横穴をあけて、当時の金で八万円の洋酒をとりよせ、穴の中へ詰めこんだ。驚くべき大穴倉だが、実に驚くべき洋酒の山で、私が行つたときも、ギツシリアキビンの山がつまっていたが、奥には本物もあつたかも知れぬ。そこでヘルマン先生は、かねて飲み仲間の親友マドロスに隣地へ小意気なバンガローをたててやり、二人でひねもす、よもすがら、飲んでいたそうで、ヘルマン先生なりふり構わず、ボロ服に、貧乏時代からのマドロスパイプをくわえたまま、

酒の外^{ほか}には余念がなかったそうである。

独探のケンギを受けて、大正五年だかに国外退去を命じられたという。無実のケンギで、探照燈がたたつて怪しまれたという話であつたが、快男子を無益に苦しめたものである。

飲み仲間のいたバンガローに当時は日本人の老画家が住んでいて、廃屋^{ぶしや}廃園に、私達を案内してくれ、ヘルマン氏の思い出をきかせてくれたのであつた。廃屋は各階毎に寝室があり、寝室にはバスルームがつき、要するにヘルマン氏は、その日の気分によつて、何階かで下界の海を眺めて酒をのみ、酔いつぶれて、バスにつかつて、寝てしまう万全の構えがととのえられているわけだ。女なんか目もくれなかつたというから、私はとても及ばぬ。これには私も、ブツタマゲた。

矢田津世子は加藤英倫の友達であつた。私は東京へ歸つてきた。加藤英倫も東京へ来た。たぶん彼の夏休みではなかつたのか。私には、もはや時日も季節も分らない。とにかく、私と英倫とほかに誰かとウキンザアで飲んでいた。そのとき、矢田津世子が男の人と連れだつて、ウキンザアへやつてきた。英倫が紹介した。それから二、三日後、英倫と矢田津世子が連れだつて私の家へ遊びにきた。それが私達の知り合つた始まりであつた。



さて、私は愈々いよいよ語らなければならなくなってきた。私は何を語り、何を隠すべきであろうか。私は、なぜ、語らなければならないのか。

私は戦争中に自伝めく回想を年代記的に書きだした。戦争中は「二十一」というのを一つ書いただけで、発表する雑誌もなくなってしまったのだが、私がこの年代記を書きだした眼目は二十七、それから三十であった。つまり、矢田津世子に就てであった。

私は果して、それが書きうるかどうか、その時から少からず疑っていた。ただ、私は、矢田津世子に就て書くことによって、何物かが書かれ、何物かが明らかにされる。私はそれを信じることでできたから、私はいつか、書きうるようにならなければいけないのだと考えていたのであった。

始めからハッキリ言ってしまうと、私たちは最後まで肉体の交渉はなかった。然し、メチルドを思うスタンダールのような純一な思いは私にはない。私はただ、どうしても、肉体にふれる勇気がなかった。接吻したことすら、恋し合うようになって、五年目の三十一の冬の夜にただ一度。彼女の顔は死のように蒼あおざめており、私たちの間には、冬よりも冷つめたいものが立ちはだかつているようで、私はただ苦しみの外ほかなにもなかった。たかが肉体ではないか、私は思ったが、又、肉体はどこにでもあるのだから、この肉体だけは別に

して、という心の叫びをどうすることもできなかった。

そして、その接吻の夜、私は別れると、夜ふけの私の部屋で、矢田津世子へ絶交の手紙を書いたのだ。もう会いたくない、私はあなたの肉体が怖ろしくなったから、そして、私自身の肉体が厭いやになったから、と。そのときは、それが本当の気持であつたのかも知れぬ。その時以来、私は矢田津世子に会わないのだ。彼女は死んだ。そして私はおくやみにも、墓参にも行きはしない。

その後、私は、まるで彼女の肉体に復讐ふくしゅうする鬼のようであつた。私は彼女の肉体をはずかしめるために小説を書いているのかと疑うたぐらねばならないことが幾度かあつた。私は筆を投げて、顔を掩おほうたこともある。

私は戦争中、ある人妻と遊んでいた。その良人おつとは戦死していた。この女の肉体は、最も微妙な肉体で、そういう肉体の所有者らしく、貞操観は何もなく、遊ぶ以外に目的はないようだった。

この女は常にはただニヤニヤしているばかりの凡そだらしない、はりあいのない女であつたが、遊びの時の奔騰ほんとうする情熱はまるで神秘的気合のこめられた妖精ようせいであつた。別の人間としか思われない。

然し、淫^{いんらんく}樂は、この特別な肉体によつてすらも、人の心はみたされはせぬ。私が矢田津世子の肉体を知らないことに満ち足りる思いを感じるようになったのは、そのときからで、それは又、あたかも彼女の死のあとだから、無の清潔が私を安らかにもしてくれた。魅力のこもった肉体は、わびしいものだ。私はその後、娼婦あがりの全く肉体の感動を知らない女と知ると、微妙な女の肉体とあいびきするのが、気がすすまぬようになっていた。

娼婦あがりの感動を知らない肉体は、妙に清潔であつた。私は始め無感動が物足りないと思つたのだが、だんだんそうではなくなつて、遊びの途中に私自身もふとボンヤリして、物思いに耽^{ふけ}ることがあつたり、ふと気がついて女を見ると、私の目もそうであるに相違ないのだが、憎むような目をしている。憎んでいるのでもないのだけれども、他人、無関心、そういうものが、二人というツナガリ自体に重なり合つた目であつた。

「憎んでいる？」

女はただモノうげに首をふつたり、時には全然返事をせず、目をそらしたり、首をそらしたりする。それを見ていること自体が、まるで私はなつかしいような気持であつた。遊び自体がまったく無関心であり、他人であること、それは静寂で、澄んでいて、騒音のな

い感じであつた。

そして私は矢田津世子の肉体を知らないことを喜んだ。その肉体は、この二人の女ほど微妙な魅力もこもつておらず、静寂で、無関心である筈はない。私にとって、女体の不完全な騒音は、助平根性をのぞけば、侘^{わび}しくなるばかりだから。淫樂は悲しい。否^{いな}、淫樂自体が悲しいのではなく、我々の知識が悲しい。

私は先ほどスタンダールのメチルドのことにふれたが、あれはどうも、ひどい誇張で、本心であるとは思われない。私にとって、矢田津世子はもはや特別な女ではなく、私は今に、もつとバカげた、犬のような惚れ方を、どこかの女にするような予感がつきまといている。そのくせ私は、惚れることには、ひどく退屈しているのだが。



英倫と一緒に遊びに来た矢田津世子は私の家へ本を忘れて行った。ヴァレリイ・ラルボオの何とかいう翻訳本であつた。私はそれが、その本をとどけるために、遊びに来いという謎^{なぞ}ではないか、と疑つた。私は置き残された一冊の本のおかげで、頭のシンがしびれるぐらい、思い耽らねばならなかつた。なぜなら私はその日から、恋の虫につかれたのだから。私は一冊の本の中の矢田津世子の心に話しかけた。遊びにこいというのですか。そう

信じていいのですか。

然し、決断がつかないうちに、手紙がきた。本のことにはふれておらず、ただ遊びに来てくれるようにという文面であつたが、私達が突然親しくなるには家庭の事情もあり、新潟鉄工所の社長であつたSという家が矢田家と親戚であり、S家と私の新潟の生家は同じ町内で、親たちも親しく往来しており、私も子供の頃は屢々遊びに行ったものだった。

私の母が矢田さんを親愛したのも、そのつながりがあるせいであり、矢田さんの母が私を愛してくれたのも、第一には、そのせいだった。私は遊びに行った始めての日、母と娘にかこまれ、家族の一人のような食卓で、酒を飲まされて寛いでいた。

その日、帰宅した私は、喜びのために、もはや、まったく、一睡もできなかった。私はその苦痛に驚いた。ねむらぬ夜が白々と明けてくる。その夜明けが、私の目には、狂氣のように映り、私の頭は割れ裂けそうで、そして夜明けが割れ裂けそうであつた。

この得恋の苦しみ（まだ得恋には至らなかつたが、私にとってはすでに得恋の歡喜であつた）は、私の始めての経験だから、これは私の初恋であつたに相違ない。然し、この得恋の苦しみ、つまり恋を得たために幾度かが眠り得なかつた苦しみは、その後も、別の女の幾人かに、経験し、先ほどの二人の女のいずれにも、その肉体を始めて得た日、そして

幾夜か、睡^{ねむ}り得ぬ狂気の夜々があつた。得恋は失恋と同じ苦痛と不安と狂気にみちている。失恋と同じ嫉妬^{しつと}にすら満ちている。すると、その翌日は手紙が来た。私はその嬉^{うれ}しさに、再び、ねむることができなかった。

そのころ「桜」という雑誌がでることになった。大島というインチキ千萬な男がもくろんだ仕事で、井上友一郎、菱^{ひしやましゅうぞう}山修三、田村泰次郎^{たむらたいじろう}、死んだ河田誠一、真杉静枝などが同人で、矢田津世子も加わり、矢田津世子から、私に加入をすすめてきた。私は非常に不快で、加入するのが厭^{いと}だったが、矢田津世子に、あなたはなぜこんな不純な雑誌に加入したのですか、ときくと、あなたと会うことができるから、と言う。私は夢^ごの如くに、幸福だった。私は二ツ返事で加入した。

私たちは屢々会つた。三日に一度は手紙がつき、私も書いた。会つているときだけが幸福だった。顔を見ているだけで、みちたりていた。別れると、別れた瞬間から苦痛であつた。

「桜」はインチキな雑誌であつたが、井上、田村、河田はいずれも善意にみちた人達で、（菱山は私^{わたし}がたのんで加入してもらつたのだ）私は特に河田には氣質的にひどく親愛を感じていたが、彼は肺病で、才能の開花のきざしを見せただけで夭^{ようせつ}折したのは残念だった。

彼はすぐれた詩人であった。

インチキな雑誌であったが、時事新報が大いに後援してくれたのは、編輯者の寅さんとらの好意と、これから述べる次の理由によるせいだと思われる。

ある日、酔っ払った寅さんが、私たちに話をした。時事の編輯局長だか総務局長だか、ともかく最高幹部のWが矢田津世子と恋仲で、ある日、社内で日記の手帳を落した。拾ったのが寅さんで、日曜ごとに矢田津世子とアイビキのメモが書き入れてある。寅さんが手帳を渡したら、大慌てで、ポケットへもぐしこんだという。寅さんはもとより私が矢田津世子に恋していることは知らないのだ。居合せたのが誰々だったか忘れたが、みんな声をたてて笑った。私が、笑い得べき。私は苦惱、失意の地獄へつき落された。

私がウエンザアで矢田津世子と始めて会った日、矢田津世子の同伴した男というのが、すなわ即ち、時事の最高幹部なるWであった。加藤英倫が私に矢田津世子を紹介し、そのまま別れて私が自席で友人達と話していると、矢田津世子がきて、時事のW氏に紹介したいから、W氏是一目でああなたが好きになり、あの席からあなたを眺めて、すばらしい青年だと激賞していられるのです、と言った。そこで私はWの席へ行き、話を交したのであった。

「桜」の結成の記念写真が時事に大きく掲載された。私は特に代表の意味で、新しさだか、

新しいモラルだか、文学だか、とにかく新しいということの何かに就て、三回だかのエッセイを書かされていた。それは寅さんの「桜」に対する好意であり、寅さんは又、私に甚だ好意をよせてくれたのだが（寅さんの本名を今思いだした。彼は後日、作家となった笹本寅である）私は然し寅さんの一言に眼前一時に暗闇くらやみとなり、私が時事に書かされたことも実はWの指金であり好意であるような邪推が、——私は邪推した。せずにいられたかった。Wの好意を受けたことの不潔さのために、わが身を憎み、呪った。

寅さんの話は思い当ることのみ。矢田津世子は日曜毎に所用があり、「桜」の会はそのため日曜をさける例であり、私も亦、日曜には彼女を訪ねても不在であることを告げられていたのである。

如何なる力がともかく私を支え得て、私はわが家へ帰り得たのか、私は全く、病人であった。



私はまったく臆病になった。手紙は三日目ぐらいに来つづけていた。同人の会でも会つたし、その他の場所でも会っていた。

Wのことは同人間でも公然知れわたっていた。彼等は私の心事を察して、私の前では決

してそれに触れぬようにいたわってくれたが、いたわりすらも、私には苦痛であった。

創刊号の同人の座談会で、私は例の鼻ツ柱で威勢よく先輩諸先生の作品に悪口あつこうぞうごん雑言をあげせつづけたものであったが、その中で一句、私の言葉に矢田津世子が同感した言葉があった。私はその言葉を忘れたが、それは恋人に対してのみ用いる種類の甘ったるい言葉であった。

校正の日、同人全部印刷所へつめていたが、まさしくその日は日曜であり、矢田津世子のみ、真杉静枝か河田かに校正をたのみ、姿を見せていなかった。その日曜が矢田津世子にどういう日かは、あらゆる同人が知っていたのだ。

座談会の例の一言に、河田だか、田村だか、井上だか、ふきだして、これは凄すこいね、このままケズらず載せたものかね、と見廻みまわすと、真杉静枝が間髪かんはつを容れず、ケズることないわ、ホントにそう言ったのですもの、と叫んだ。それは低いが、強烈な語気で、私はその後ずいぶん真杉さんとはおつきあいたしたが、このような激しい語気はほかにきいたことがない。深い憎しみが、こめられていた。

私は然し、わが身の如くに、切なかつたのだ。私が憎まれているが如くに。私は矢田津世子をあわれみ、真杉静枝をむしろ呪った。同時に真杉静枝に内心深く感謝したのは、私

も切に、この言葉のケズられざらんことを乞い、祈っていたから。

その一言は、私にとっては、絶望の中の灯であったのだ。悲しい願いがあるものだ。この一言が地上に形をとどめて残ってくれますように。せめて、この一言のみが、掻き消え失せてくれないように、と。

私は然し、私の必死の希願に就て、自ら一語も発することができなかった。私はただ、幸いに残り得た一語のいのちを胸にだきしめていたのである。ああ、これは残そう。これは面白い言葉じゃよ、とそれに答えた河田の言葉を私は今も忘れることができないほどである。

私はすでにその前に、矢田さんと結婚したいということを母に言った。母も即座にうなずいていたが、やがて日数^{ひかず}へて、いつ結婚するか、という。私は胸をしめつけられて、返事ができず、ようやく声がでるようになると、もう厭なんだ、やめたんだ、と答えて席を立った。

然し、三日にあげず手紙が来ているのだから、母は私の言葉を痴話喧嘩^{ちわけんか}ぐらいにしか受けとらず、あるとき親戚の者がきたとき、私を指して、今度、矢田津世子と結婚するのだ、と言う。嘘^{うそ}だ！ 結婚しないと云っているのに！ 私は唐突に叫んだ。叫ぶことが、無我

夢中であつた。私の血は逆流していた。私は母の淋^{さび}しい顔を思いだす。

その頃だつた。例の十七の娘が、神経衰弱の如くになつて、足もとをフラフラさせ、私を訪ねてきて、酒を飲みに行こうよ、お金は私が持っているから、と言う。暮れがたであつた。私は仕事があつて今夜は酒がのめないからと嘘をつき、ともかく、そのへんまで送ろうと一緒に歩くと、女は憑かれたようにとりとめもなく口走り、せつなげな笑いが仮面のようにその顔にはりついている。そのうちに、ふと、知ってるわ、矢田さんに惚れたんでしよう、と言つた。恨む声ではなかつた。せつなげな笑いが、まだ、はりついていた。氣象の激しい娘であつた。モナミだか千疋^{せんびき}屋^やだかで、テーブルの上のガラスの瓶^{びん}をこわしたことがある。ボーイがきて、六円いただきます、と言う。娘は十二円ボーイに渡して、隣のテーブルの花瓶をとると、エイと土間に叩^{たた}きつけて、ミジンにわつて、サヨナラと出てきた。そういう氣象を知っている私であるから、私に対する娘のあまりのか弱さに、私は暗然たる思いもあつた。

「片思いなの？」

娘は私の顔をのぞいた。それは、優しい心によつて語られた、愛情にみちた言葉であつた。恨む心はミジンもなく、いたわる心だけなのだ。私は答える言葉もなく、答えない心

もなかった。

このへんで別れようと私が言うと、ウン、娘はうなずいて、私の手を握り、まだつづいているあの切なげな笑いで、仕事がすんだら、又、のもうよね、そう言つて、娘は手をふり、素直に闇の底へ消えてしまった。これが娘と私との最後の別れであつた。

私も、亦、矢田津世子を恨む心はなかった。なじる心もなかった。矢田津世子は、私に向い、一緒に旅行しましょうよ、登山したい、山の温泉へ泊りたい、と言う。私はただ笑い顔によつて答え得るだけだ。その笑い顔は、私の心はあなたのことで一ぱいだ、いつもあなたを思いつづけている、然し、私はあなたと旅行はできない。旅行して、あなたの肉体を知ると、私はWと同じ男に成り下るような気がするから。あなたにとって、私が成り下るのではなく、私自身にとつて、Wが私と同格になるから。私はあなたに就いて、Wのことなど信じたくないのだ。それを忘れてしまいたい。それを知らずにあなたを恋したあのままの心を、私は忘れたくないのだ、と。もとより私の笑い顔がそのような意味であることを、矢田津世子が解きうる由もない。

河田誠一が矢田津世子を訪ねたのも、その頃だ。なぜ坂口と結婚しないか、それをすすめるために。その話を、私は河田から告げられず、矢田津世子から、きかされたのだ。

その知らせには、たしかに意味があつた。なぜあなたは結婚しようと言わないのか。言ってくれば、私はいつでも結婚するのに、という意味が。矢田津世子のあらゆる讃辞が、河田誠一にささげられて、私の前に述べられている。その心のあたたかさと、まじめさと、友情の深さに就て。それは、すべて、河田の彼女への忠告を彼女がうけいれたというアカシであり、私に対するサイソクであつた。私はそれに対しても、ただ、笑い顔によつてのみ、答えていた。

私の心は、かたくなであつた。石の如くに結ばれていた。

要するに、私は自分の心情に従順ではなかつたのである、本心とウラハラなことをせざるを得なくなる。それが私の性格的な遊びのようなもので、自虐的のようでもあるが、要するに、遊びだ。私はそのころ牧野信一の家で、はせがわ長谷川何とかという手相、指紋の研究家に手をみられて、君の性格はアマノジャクそのものだ、と言われた。然し、アマノジャクとは何か。ヒネクレているということのほか外に、アマツタレているという意味があると私は思う。物自体よりも物を雰囲気的に受けとろうとする気分的なセンチメンタリズムも多分にある、要するに、いいところは一つもない。然し、本人は案外いい気なもので、それに私は、センチメンタルではあるけれども、同時に、野放図な楽天家でもあつた。ええママヨ、

どうにでもなれ、ということが、いつも、つきまどっているのだから。

矢田津世子と私は「桜」をやめた。二号目ぐらいで、菱山もやめた筈だ。私はもう、あのころのことは殆ど記憶にない。雑誌のことも、矢田津世子のことも。私は特に彼女のこゝとをつとめて忘れようとした長い期間があるのだから。

そのころのことで変に鮮明に覚えているのは、中原中也と吉原のバーで飲んで、——それがその頃であるのは私は一時女遊びに遠ざかっていたからで、中也とのんで吉原へ行く、と、へへん（彼は先ずこういうセキバライをしておもむろに嘲笑にかかるのである）ジョルジュ・サンドにふられて戻ってきたか、と言った。銀座でしたたかよっぱらって吉原へきて時間があるのでバーでのむと、ここの女給の一人と私が忽ち意気投合した。中也は口惜しがって一枚ずつ、洋服、ズボン、シャツ、みんなぬぎ、サルマタ一枚になって、ねてしまった。彼は酔っ払うと、ハダカになつて寝てしまう悪癖があるが、このときは心中大いに面白くないから更にふてくされて、のびたので、だらしないこと甚^{はなはだ}しく、椅子^{いす}からズリ落ちて大きな口をアングリあけて土間の上へ大の字にノビてしまった。女と私は看板後あいびきの約束を結び、ともかく中也だけは吉原へ送りこんでこななければならぬ段となつたが、ノビてしまうと容易なことでは目を覚^{さま}さず、もとより洋服をきせうる段ではない。

仕方がないから裸の中也の手をひっぱって外へでると、歩きながらも八分はちぶは居眠り、八十の老爺ろうやのように腰をまげて、頭をたれ、がくんがくんうなずきながら、よろよろふらふら、私に手をひっぱられてついてくる。うしろから女給が洋服をもってきてくれる。裸で道中なるものかという鉄則を破って目出たく妓楼ぎろうへ押しこむことができたが、三軒ぐらい門前払いをくわされるうちに、ようやく中也もいくらか正氣づいて、泊めてもらうことができた。そのとき入口をあがりこんだ中也が急に大きな声で、

「ヤヨ、女はおらぬか、女は」

と叫んで、キヨロキヨロすると、

「何を言ってるのさ。この酔っ払い」

娼妓が腹立たしげに突きとばしたので、中也はよろけて、ひっくりかえってしまった。それを眺めて、私達は戻ったのである。

私が連れこまれた女のアパートは、窓の外に医院があつて薬品の匂いの漂う部屋であつた。女はうんと背伸びをして、ふと気がついて、背伸びをしたいなと思う時でも、する気にならない時があるわね、と言った。ほかに意味も翳かげもない単純な笑い顔だった。お人好しで、明るくて、頭が悪くて、くつたくのない女であつた。朝、目をさまして、とび起

きて、紙フウセンをふくらまして、小さな部屋をつきまわって、一人でキャアキャア喜んでいたり、全裸になって体操したり、そして、急に私にだきついてゲラゲラ笑いだしたり、娼家の朝の暗さがないので、私はこの可愛い女が好ましかった。

窓をあけて青空を眺めたら、私は急に旅行に行きたくなった。女も大賛成で、私は人から貰って三日目ばかりの時計、これは全く私に縁がないようにその宿命が仕組まれていたとしか思われないほど高級品であつたから、女は大いに気をきかし、勇み立ち、この質屋、あの古物商、知りあいの商店の旦那だんなをよびだして、かけあたり、もういい加減で売つちやえと云つても、ダメダメ安すぎる、大いにハリキツて倦うむことを知らない。質屋の出入にも、腕をくるくるふりまわしながら飛んだり跳ねはたり、ヘッピリ腰でのぞきこむかと思うと急に威勢よくコンチハと大きな声で戸をあけたり、まるで天性あらゆる宿命を陽気に送り迎えているとしか思われぬようだった。そして、私の沈黙の気質だの、陰鬱な顔附などを全然気にかけていなかった。バスの車しゃしょう掌しょうをしていたが、おツリの出し入れが面倒くさくてやめてしまったのだそうで、道を歩きながら車掌のマネをしてみせて、次は何々でございます、ストツプねがいます、大きな声、往来の人々がビックリふりむいて顔を見るのを気にかける様子もない。

私達は足掛け八日旅行した。たしか八日だったと思う。八日帰りがなんとか言ったが、金がなくなってしまったので、女が大いにケンヤクを主張して安温泉を廻って歩き、ヒルメシはカツドンばかり食わされた。私がおかしくて仕方がなかったのは、この女は人の顔の品定めなどテンからやらぬたちなのだが、バスに乗った時に限って女車掌の品定めをして、あら、あの子、凄いいشانだ、と言う。一向にشانでもないから、君の会社はよっぽどデブばかり揃ってたんだな、と笑うと、この時ばかりはいささかてれて、ウームと一と唸り、メーデーだか何だかに赤旗かつぐのが羨しくてバスの車掌になったのだけれども、共産党になれと言われて、閉口したのだそうである。まったくこの女はオツチヨコチヨイで、出鱈目だったが、共産党の地下運動にはカブトをぬぐ性質に相違なく、五十銭寄附したけれども、あとは降参、逃げだしたと言っていた。モグることができないタチであつた。私が旅館でふと思うのは、矢田津世子もWとこんなところへ来るのだろうか、ということだった。尤も、我々の旅館よりは高級であるに相違ない。待合であるかも知れぬ。尚それよりも怖れたのは、この旅先で、矢田津世子とWの姿を見かけないか、ということだった。私と女が見られることへの怖れではなかった。純一に、彼等の姿を見かけることの、その事実を確かめさせられることの恐怖と苦痛であつた。

私はそのころ、路上でふと立ちすくむことがあった。胸は唐突にしめつけられ、呼吸が一瞬とまっている。私はふりむいて一目散に逃げる衝動にかられているのだ。私は街角を怖れた。又、街角から曲って出てくる人を怖れた。私は矢田津世子の幻覚におびえていたのだ。よく見れば似つかぬ女が、見た瞬間には矢田津世子に思われ、私は屢々路上に立ちすくんでいたのであった。

別して私は温泉で、矢田津世子とWの幻覚になやまされた。こんな安宿に彼等が泊る筈はないと信じながら、廊下で見かける人影に、とつぜん胸がしめつけられ、息がつまって、立ちすくむ。隣の男女の話声の、よくきけば凡そ似つかぬ女の声が、始めてきこえた一瞬間だけは矢田津世子の声にきこえてしまう。

私は女給と泊り歩いている私が、矢田津世子への復讐であるような心は、ミジンもなかった。私は今、すぐこの足で、矢田津世子を訪ねて、結婚しましょう、と言えば、結婚することもできるのだった。それは疑うべからざること、そのことだけでは、一とかけの疑念も不安もなかったのだ。もとより、憎む時間はあった。然し、私があの人の影におびえて立ちすくむとき、私自身の恐怖の中には、あの人に苦痛と恥辱ちじよくを与えたくない思いやりが常にこめられていたのだ。

同時に私はWを憎んでもいなかった。矢田津世子とW。矢田津世子と私。私の心には、この二つを対比し、対立させる考え方が欠けているか、或いは非常に稀薄^{きはく}であつた。矢田津世子とW。私はそれを考える。最も多く考えた。然し、矢田津世子と私、という立場に対立させて考えてはいなかった。つまり、同一線上に二つを並べていなかったのだ。

私が矢田津世子と結婚する。すると、むしろ、私達は、彼女とWにハッキリ対立してしまふ。結婚すれば、私は勝ちうる。果して、勝ちうるであろうか。私はむしろ、対立と、自分の低さ、位置の低さを自覚するばかりではないか。

私は然し、そのように考えていたわけではない。そのように考えることの必要が、必要すらも、欠けていたのだ。即ち、私は、すでに結婚を諦めていた。時に軽率な情念のそれをめぐつて動くことをとめる術^{すべ}はないけれども、より深い、恐らく心意の奥底で、大いなる諦めを結んでいた。不動盤^{ふどうばん}石^{いし}の澱^{よじ}みの姿に根を張つた石に似た雲のような諦^{てい}念^{ねん}がある。それは一人の愛する女を諦めているばかりではなかった。より大いなるものを諦めていた。より大いなる物とは？ それは私には、分らない。ただ、何物か、であるだけだつた。そして、その大いなる何物かの重い澱みの片隅に、一人の女がいるだけのことであつた。

私はむしろ、この明るいオツチヨコチヨイの女給をつれて、矢田津世子と一緒に
と云った山々、かみこうち上高地やおくしらね奥白根の温泉宿へ行ってみればよかったと思つた。なぜであ
るかは分らない。それはどうでもよいことだ。私はただ、私をそこへ誘つた矢田津世子は、
だから、たぶん、ほかの男とはそこへ行きはしないだろうと、ふと考えた。然し、又、だ
から、たぶん、あるいは今ごろ、そこにいるのではないかと、とも考えた。とりとめもな
く、ふと、思う。私は山を歩いている。穂高を、やり槍を、赤石を。すると、私のつれている
女は、矢田津世子だつた。そして私は、ものうい昼の湯の宿の物思いから、我にかえる。
私の女が、ひとりで喋り、ひとりでハシヤいできるときにも、私はそれをきいたり見たり
しているような笑い顔で、ふと物思いに落ちこんでいた。

「あなたは奥さんないの？　アア、うそ。あるでしょう」と、女がきく。

「あるよ」

「お子さんは」

「一人だけ」

「あなたの奥さんは、とても美人よ。私、わかるわ。ツンとした、とても凄い美人なのよ」
「どうして、分る」

「ほら、当ったでしょう。私の経験なのよ。私みたいな変チクリンなお多福を可愛がる人の奥さんは、御美人よ。私、何人も、その奥さんの顔を見てやったわ。美人女給を口説く人の奥さんは、みんな、ダメ。でもね、私を可愛がる人は、特別優秀なのよ。なぜだろうな。よつぽど私が、できそこないなのかしら」然し、女は、どことなく可愛い顔立ちだった。それに、姿がスラリとして、色気があった。心が無邪気であるように、全身に、無邪気な翳がゆれていた。二十三とか四であつたが、十七、八の小娘のようなところがあつた。全裸になつて体操するのが大好きで、ひとり余念もなく、大らかで、たのしげで、だから清潔で、温泉の湯ぶねの中でも、のびたり、ちぢんだり、桶おけをマリか風センにして遊んでいたり、いつも動いているのだ。男に裸体を見せることを羞はづかしがらず、腕や腹や股またに墨筆で絵を書かせてキヤアキヤアよろこび、だからむしろ心をそる色情は稀薄であつた。マネキンになりたいけれども、シャンじやないからダメなんだ、とこぼしていたが、私はそのとき、なるほどこれは天来のマネキンとでもいうのだらうなと思つたほど、常に動きが、そして言葉が、生き生きとしていた。あれは、どこの宿であつたか。もう旅の終りで、あの日は沼津で映画だか芝居だか見て、私はそれを見ながら二合瓶をラツパのみにして、いくら酔っていたのだが、それから長岡だかその隣の温泉だかへ泊つたときであつたと

思う。女はいくらかシンミリして、

「ねえ、まだ、東京へ帰るのは厭だな。もう一週間ばかり、つきあわない。私、このへんの酒場で女給になつて、稼ぐから」

「チツプで宿^{やど}銭^{せん}が払えるものか」

「ああ、そうか」女はひどくガツカリした。もとより、それは気まぐれだった。気まぐれ千万な女なのだ。私を愛しているせいなどでは毛頭ない。然し、気まぐれながら、いくらかシンミリしているので、それが珍らしいことだったから、私は今も何か侘しさを思いだす。私はその後、よく旅先の宿屋の部屋の孤^こ愁^{しゅう}の中で、このときの女のことを思いだしたものだつた。

「このくらい遊んで帰ると、私だつて、ちよつと、ぐあいが悪いのよ。あとは野となれ、山となれ、か。あなたの奥さん、さぞ怒っているだろうな。ねえ、マダム、怖い？」女の顔はいつもと違って、まじめであつた。

「もう十日、もうひと月、ねえ、私、このへんで稼いで、一緒にいたいな。あなたのマダムをうんと怒らしてやりたいのよ。私、どこかのマダムを二、三人、殺してやりたいわ。厭になつちまうな」と言つた。そして笑つた。それはもう、いつもの通りの女であつた。

シンからお人好しの女でも、そんな残酷な気持があるのかな、と、私は面白かった。顔も知らない対象にまで嫉妬だか癪癪だか起している、そのくせ、はつきりした対象にはむしろ嫉妬を起しそうもない女であった。

私はそのとき、矢田津世子は死んでくれれば一番よいのだ、ということをハッキリ気附いた。そして、そんなことを祈っている私の心の低さ、卑しき、あわれさ、私はうんざりしていた。まったく一と思いに、この女とこのへんの土地で、しばらく住んでみようかと、女には何喰^{なにく}わぬ顔で、思いめぐらしたほどであった。



私の心の何物か、大いなる諦め。その暗い泥のような広い澱みは、いわば、一つの疲れのようなものであった。その大いなる澱みの中では、矢田津世子は、たしかに片隅の一とさきの小さな影にすぎなかったが、その澱みの暗い厚さを深めたもの、大きな疲れを与えたものは、あるいは、矢田津世子であるかも知れぬと考える。

私はそのころから、有名な作家などにはならなくともよい、どうにとなれ、と考えた。元々私は、文学の始めから、落伍者の文学を考えていた。それは青年の、むしろ気鋭な銜^げ気^{んき}ですらあったけれども、やっぱり、虚無的なものではあった。私は然し、再びそこへ戻

ったのではなかったようだ。私の心に、気鋭なもの、一つの支柱、何か、ハリアイが失われていた。私はやぶれかぶれになった。あらゆる生き方に、文学に。そして私の魂の転落が、このときから、始まる。

私はもう、矢田津世子に会わなかった。まる三年後、矢田津世子が、私を訪ねて、現われるまで。

青空文庫情報

底本：「風と光と二十の私と・いずこへ 他十六篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年11月14日第1刷発行

2013（平成25）年1月25日第3刷発行

底本の親本：「坂口安吾全集 05」筑摩書房

1998（平成10）年6月20日初版第1刷発行

初出：「新潮 第四四卷第三号」

1947（昭和22）年3月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：酒井裕二

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二十七歳

坂口安吾

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>